

博士論文要旨

一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程 黒岩裕市

本博士論文は、19世紀後半の西洋の精神医学や性科学、あるいは、それらをモデルに大正時代の日本でブームになった性欲学が構築した「同性愛」概念を手がかりに、日本文学の男性同性愛表象を分析するものである。特に、近代日本の性愛規範が確立した明治末期から昭和初期に注目し、森鷗外、江戸川乱歩、堀辰雄の作品を取り上げる。彼らの文学テクストに「同性愛」概念が取り入れられるのと同時に、それが変容する過程を詳細に読む。本論文の構成は以下のとおりである。

- 序章 文学研究と男性同性愛表象分析——レズビアン／ゲイ・スタディーズ、クィア理論との関係から
- 第1章 “Urning”の導入——森鷗外『キタ・セクスアリス』
- 第2章 “homosexuel”の精神化——森鷗外『青年』
- 第3章 精神医学と同性愛の「種族化」
- 第4章 性欲学における同性愛の変容
- 第5章 同性愛の感染性——江戸川乱歩『一寸法師』
- 第6章 同性愛の周縁化とその困難——江戸川乱歩『孤島の鬼』
- 第7章 男性同性愛表象の仏日比較——マルセル・プルースト『ソドムとゴモラ』Ⅰと堀辰雄『燃ゆる頬』
- 終章 戦時下、そして、戦後の男性同性愛表象に向けて

序章ではまず、日本の文学作品を論じる本論文にとって重要な「男色／女色」概念と「同性愛／異性愛」概念の相違点を確認した。イヴ・コゾフスキー・セジウィックの言葉を借りれば、前者が「一般化」、後者が「局所化」の見解に相当するのだが、その二つの見解の間の矛盾・亀裂・衝突・二重性を本論文では読解の軸にする。続いて、英語圏、とりわけ、米国で盛んに実践され、1990年代中盤以降に日本でも試みられているレズビアン／ゲイ・スタディーズとクィア理論を概説し、それぞれの問題点と可能性を示した。さらに、国内外の社会史の領域における近代日本の男性同性愛研究の成果を踏まえつつ、同性愛言説史を再構成するうえで、文学作品が持つ意義を指摘した。

第1章・第2章は森鷗外の作品を分析するものである。作家／医師であった森鷗外／林太郎は早くから文学評論でクラフト＝エビングなど精神医学の知見を参照しており、文学作品にも、明治末期の時点ですでに「同性愛」概念を持ち出している。明治中盤以降、「同性愛」概念は医学領域では時おり言及されていたものの、文学領域への導入としてはきわめて先駆的である。それゆえに、鷗外の作品の読解を本論文の出発点に据えた。

第1章では、『キタ・セクスアリス』（1909年）を読んだ。『キタ・セクスアリス』で描かれる明治初期の男子学生集団内部では、性愛は、「男色／女色」概念によって規定され、男子学生であれば誰もが同性愛に関与し得るととらえられている。その一方で、この作品には、男子学生の「男色」を表象する過程で、西洋の精神医学に由来する“Urning”という概念がドイツ語のまま適用され、一見、「男色」が「科学的」に解釈し直されているかのように見える。しかし実際には、「男色」表象を通じてテクストで“Urning”は無効化されている。本論文ではそのプロセスを詳細にたどった。なお、この章では、当時の男子学生が愛読し、明治期の男性同性愛表象に取り組む場合には欠かすことのできない、『賤のおだまき』

という書物とその受容にも目を向け、「男色」が肯定される際に、性行為が禁じられ、理念化される仕組みにも触れた。

続く第2章では、『青年』(1911年)を読んだ。『青年』では明治末期の青年同士のホモエロティックで、かつ、ミソジニスティックな「友情」が繰り返されている。この作品にも、“homosexuel”という概念がフランス語で持ち込まれている。だが、ここでも男同士の「友情」が「科学」言説によって再解釈されるわけではない。テキストでは、元来、「性欲」に他ならない“homosexualité”が、青年同士の「友情」の表象を通して、「愛」化され、精神化されるのである。本論文では、鷗外のテキストの「文学」表象におけるこうした「科学」言説の変容、あるいは、読みかえに光を当てた。

第3章では、鷗外のテキストにもたらされていながらも十分には機能していなかった、「同性愛」概念を概説した。まずは、『キタ・セクスアリス』の「男色」表象に反論した河岡潮風のエッセイ「学生の暗面に蟠れる男色の一大悪風を痛罵す」(1909年)に注目し、いかにして『キタ・セクスアリス』の“Urning”が読み落とされているかを分析した。次に、性科学・性欲学の礎を作ったドイツ・オーストリアの精神医学者クラフト=エビングの *Psychopathia Sexualis* (1886年) の邦訳『変態性慾心理』(1913年)を取り上げた。同書では、同性愛は「先天性/後天性」の二分法を前提に、ジェンダー倒錯の度合いに従って、ミシェル・フーコーが述べるように「種族化」される。だが、そこには、それ自体をも解体せしめるような矛盾点が内包されている。本論ではそうした矛盾点を俎上にのせた。

第4章では、日本人の性欲学者羽太鋭治・澤田順次郎共著の『変態性慾論』(1915年)を中心に、「同性愛」概念が日本というコンテクストでどのように変容したかを検討した。『変態性慾心理』から基本的な枠組みを受け継ぎつつも、『変態性慾論』では、男性間性行為の脱犯罪化を企てるために提唱されたはずの同性愛の「先天性」が、むしろそれを犯罪化する根拠として持ち出されている。本論文では特にこうした転倒に着眼した。また、性欲学における江戸時代の「陰間」の再解釈、性欲学系雑誌に掲載された男性同性愛者の手紙にも触れた。

第5章・第6章は江戸川乱歩の作品の分析を行なうものである。日本の創作探偵小説の旗手であり、男性同性愛関連文献の収集家としても知られている乱歩は、大正時代に性欲学が生成した同性愛のイメージを大衆向けの文学作品に組み込んだ。昭和初期の大衆文化の興隆の中で多くの読者を想定して書かれた乱歩の作品は、「同性愛」概念の大衆化を鮮明に体現している。そのため、本論文では鷗外の次に、乱歩の作品を選択した。

第5章では、『一寸法師』(1927年)を読んだ。この作品においては、男性同性愛者は、「エロ・グロ・ナンセンス」の「グロ」と結託し、「一種異様の人種」として見世物化されている。だが、男性同性愛を描く過程で、テキストには、男性同性愛者だけではなく、すべての男性の登場人物を「異様」の側へと巻き込むような、「同性愛の感染性」が見出せる。それは性科学・性欲学が規定した「正常/異常」の境界線を根源的に問い直すものでもある。本論文では乱歩のテキストのあからさまにホモフォビックな男性同性愛表象に潜む、ホモフォビアに抵抗する端緒を指摘した。

続く第6章では、『孤島の鬼』(1930年)を読んだ。『孤島の鬼』では、つねにホモフォビアとホモエロティックな欲望が二重化されているのだが、大衆小説にふさわしい「大団円」を構成するために、物語後半で、男性同性愛者は「えたいの知れぬけだもの」と異端視され、性愛規範の確立が強引なまでに試みられる。しかしながら、そうしたプロセスによって、テキストではかえって規範の暴力性や虚構性が暴露され、さらには、ホモエロティシ

ズムの残滓を通じて、性愛規範の不可能性までもが示唆されることになる。本論文では、乱歩の作品が大衆に向けられたものであるからこそ、おそらくは作者の乱歩の狙いにも背いて、テキストに宿ることになった規範への批評性を顕在化させた。なお、乱歩の作品は同性愛者をしばしばいわゆる「フリーク」と重ね合わせる。本論でも、英語圏の先行論文を参照しつつ、障害表象と同性愛表象との接点を探った。

第7章では、堀辰雄の『燃ゆる頬』(1932年)を読んだ。鷗外や乱歩とは異なり、堀は意識的に「科学」言説から男性同性愛を表象した作家ではない。だが、『燃ゆる頬』のプレテクストになっていると思われるフランスの作家マルセル・プルーストの『ソドムとゴモラ』I(1921年)は、精神医学の言説から紡ぎ出されたテキストである。これら二つの男性同性愛表象を比較検討することで、『燃ゆる頬』の少年にさりげなく浮上する「少女のような弱々しい微笑」に、精神医学の痕跡を見出した。そうした痕跡は、ホモエロティックに崇高化され、同時にその時期を越えた男性同性愛へのホモフォビアに裏打ちされた、少年の同性愛を不安定化させるものである。

なお、1920年代のフランス文学では、『ソドムとゴモラ』をきっかけに男性同性愛のテーマが「流行」した。そこで本章では、フランスの文芸雑誌『マルジュ』の特集(1926年)を中心に、同時代の作家・批評家がそれをどのように受け止めたのかについて概観し、こうした「流行」が『燃ゆる頬』という日本文学のテキストにも到達している点を示した。

終章では、戦時下の岩田準一の活動や戦後に展開されたホモエロティックな軍隊の表象、三島由紀夫の『仮面の告白』(1949年)と『禁色』(1953年)に触れ、これまでの各章の議論を総括した。最後に、今後の研究課題を提示した。

以上、本論文では、精神医学や性科学・性欲学が構築した性愛観念が鷗外、乱歩、堀のテキストに取り込まれ、反復される軌跡をたどった。それと同時に、文学表象を通して性愛規範が攪乱され、変容し、中立性や客観性のもとに偽装された偏向性がテキストにおいて明るみに出される軌跡も詳らかにした。こうした文学作品の読解・再読を通じて、本論文は、近代日本の性愛規範の基盤にある「同性愛／異性愛」概念が生成する、ホモフォビアの非整合性・非合理性に抵抗するところまでを目論んだ。

鷗外の『キタ・セクスアリス』が発表されてから約100年が経過した今日に至っても、「科学」言説に基づいたホモフォビアは再生産され続けている。それゆえ、私は、本博士論文の取り組みはきわめてアクチュアルな意義を有するものであると考える。